

世界定めの主体としての我

——全生涯を貫く児言態的視点——

宮田 雅智

1. はじめに

最近になって、児言態で自分がずっと考えて続けたことは「世界定め」に集約されるんだな、と思うようになりました。

これに関わりの深い特集をしたのが雑誌15号「子どもとつての時間と空間」ですが、本来はここに「人間（ジンカン）」が加わります。上原先生によれば、これらの「人生を構成する三つの間」を意識世界に位置付ける「座標軸」のようなものを、どう個々人が設定するかによって同じ経験を積み重ねながらも「人生」が多様に変化しうる……これまでの人生も転換しうる、ということでした。

「教育」（学校教育以降の自己教育も含めて）が「個々人の生き様」（構え）に反映しなければ本来の意味をなさない事からすれば「世界定めの主体性」を育てることが教育の根源をなす目標といえるかもしれません。

「教育実践」を考える上での縦軸と横軸を

考えると縦軸は「年齢に伴う各成長の段階」、横軸は「それぞれの段階でのカリキュラム」ということになりました。

今回の内容は言わば「縦軸編」です。雑誌16号に掲載した『生命の指標（らいふ・いんできす）は我が内にあり〜児童後の子ども達への児言態的实践〜』を、その後の実践を通しての思索からまとめなおしたものです。雑誌19号に掲載した「世界定めの軸を増やす〜全教科領域に渡る児言態的視点〜」は「横軸編」と言えます。雑誌17号に掲載した『あれこれ』の中から育つ構えや活力・生命力・「重ね合わせ」という発想の獲得〜の視点から学校教育の全教科・領域について概観を述べたものです。

私は平成8年に体を壊して学校教育現場を去らざるをえなくなりました。それ以来、家庭教師として小学生から社会人までを20年あまり教えてきました。（その中には小学生の時に担任した子も含まれています）実際には

小学生の依頼、ましてや「国語」の依頼などはほとんどなく、大半は中高生の「数学」「英語」「理科」の補習や受験指導でした。その中で「児言態風の人間教育をどう盛り込むか」がいつも課題でした。

そんな模索をもとに執筆したのが16号・17号の2編だったのですが、その動機はたびたび上原先生が言及されていた「児言態は小学校の国語に限定されなくてもいい。児童後の段階や、国語以外の教育の研究も行う必要がある」という言葉からでした。

大それた言い方をすれば、児言態50周年というこの節目を機に、これらの「縦軸・横軸」について児言態的視点から「教育全体」を概観してまとめてみたいという気持ち根底にあります。

残念ながら私の体調、その他の諸事情で最近では家庭教師の仕事もほとんどなくなっています。なので特に今回は「論」というよりも「これまでのことから、こんな風に考えて

みたのですが……」ということを思いつくままの読みものという感覚で書いています。

*これまでの雑誌(記事)はこちらで閲覧できます。(広島大学 学術情報リポジトリ)
<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/journal/JidouGengoSeitaKenkyu>

2. 個々人の「世界定め」と「社会」

言うまでもないことですが、同じ現実の世界で生活しているながら、自分の日常(人生)をどうとらえていくのか等々の見方・考え方は、一人一人全く違ってきます。そうした異なる意識世界を抱いている人たちが、どう互いを認め合って共存共栄の世界を作り上げようとしてきたのか……それに対して日本人は古来より西洋的な常識からすれば特異な考え方をとり、実現させてきました。少なくとも万葉人と呼ばれていた人たちや、江戸文化が花開いた頃の庶民は、そうだったと思います。封建主義や軍国主義の印象から日本人は個々人を否定してきたというイメージがはびこっていますが、実際にはかなり寛容なところがあったようです。

ところが現代人、特にネット社会や情報端末に浸りきった若者たちの常識はそれとはだいぶかけ離れているのかもしれない。

例えば「考え方は人それぞれなんだから」という主張の最近の使われ方です。互いに認め合うというよりは「だから私の考えには口出しせず、そのまま認めろ」という考えの根拠として使われています。なのでそういった主張をする若者たちは他からの意見に対して全くといっていいほど聞く耳を持ちません。自分の意見とは異なる意見は自分の考えを侵害するものとして徹底的に排除しようとする方向に暴走することも少なくありません。

世界を定める主体が個々の人間ということからいえば、同じ場で生活を共にしていても構成員の数だけそこには違った世界が自由に成立しています。

それでも人間が「社会的存在」ということからいえばある程度の枠組みは勿論必要なのですが「そんなのわずらわしい」と拒絶した生き方の一つが「ひきこもり」なのかもしれません。自分の世界は現実の中にはない。アニメやゲームなどの仮想の世界(夢の世界)にしかないという立場です。

こうした人たちは「夢(非現実)の世界」か「現実の世界」かという二者択一の発想しかとれなくなっているともいえます。そして「夢の世界に逃げ込む生き方」をしているのですが、それは自分の夢の世界を大切にしているようで、実は極端に現実ばかりを意識している生き方なのかもしれません。

必要なのは「夢の世界」も「現実の世界」も、という両立の発想です。兎言態としては根源的には夢の世界をベースにという立場です。現実をきちんと踏まえた上で、それを突き抜けての夢の世界を大切にする生き方、という意味で「超現実な構えがとれるように」という言い方も最近ではされるようになっていきます。

(注) 夢の世界(イメージの世界)といっても実はいくつもの層をなしています。兎言態が大切になっているのは深いところからのイメージです。

また表層的なイメージ世界が他と衝突しがちなのは言うまでもないことなのですが、無意識の深い部分とつながりを持つもののほど心意伝承(ユングの集合的無意識・宗教的な言い方では神の領域)と重なりますから、やはり現実社会や常識人とは衝突しがちです。

〈上原語録〉

・現代の子どもを救う唯一の道はイメージ。子どもはこの中でのみ生きています。現代っ子は漫画とファミコンという夢の世界に逃げ込んでいます。子どもの行動はイメージが働かなければいけません。イメージは想像した結果ではなく想像力なんだ。

(平成7年2月例会)

・その人の持っている時間観・空間観によってその人の人間（ジンカン）が知れるんだよ。逆に言えばジンカンを知ることによってその人の時間観・空間観が分かるということよ。三つが重なり合えるということなんだ。

だからもっと僕自身の考え方の根底を言うならば『人間としての個体』なんて有り得ない。どっかで錯覚するように我々は教えられてしまっただけの事であって、どこに『自分自身』なんているのか、その自分自身というものが仮に言えるとするならば、その人の時間観・空間観・人間観なんだから。

（平成2年合宿）

3. 「世界定め」は「やくそくの世界」

もともと「世界定め」は江戸時代に歌舞伎に関した文献に登場した言葉だそうです。

〈上原語録〉

・脚本でも芝居でも『時』と『場所』と『人』を設定することで世界を作る。場面を変えるのは、この三つの設定を変えていくこと。

（平成5年11月例会）

「教え子たちに世界定めについて話す時にはアニメやゲームでの特に「異世界もの」と呼

ばれるジャンルを例として出します。何故「異世界なのか」というと「その世界の常識」が「この世界とは違っている」ということ……つまり「やくそく」が異なる世界だということを確認します。

こういったことをふまえるというのは当たり前のことのように、ネット上のアニメに関する感想（論争）をみてみると、異世界と呼ばれるほどではない日常系のもので、どういった世界として構成されているのかを全くふまえずに、自分の基準だけで互いの意見をぶつけあい、叩きつぶそうとしあっていることが目立ちます。

そしてここからが本題となるわけですが、日常の生活における意識世界においても、地域社会、さらには地球上の民族や国々においても、頭では「それぞれ違いがある」と分かっているけど、いざ自分の利害などがからむとなると先ほどのネット社会の例のように、自分の基準が世界標準であるような感覚で他と対立してしまっています。

最近あまりにも自己中心的でみんなから完全に相手にされなくなった幼馴染のことが、知り合いの若者たちとの間で話題になりました。その幼馴染は何年もの間「他人は利用するための踏み台」という姿勢で、多くの知り合いの善意、さらには人生を踏みにじり、相

手をどん底に叩き込んでも「俺は関係ない」とシラを切り、本人の中では自分が完全に正当化され続けていたそうです。

「世界定め」ということからすれば本人にとっては、非常識な生き方（考え方）でも何でもないわけです。自分が「それが当たり前だ」と考えた時点で、もうその意識世界はその人間の中で「正しい世界」として成立してしまっているからです。

しかし2節でも述べたようにこうしたことまでがまかり通るようになってしまっただけは日常も世界平和も破綻します。

日本人が「世間」や「気位・恥」「粹」を重視した生活を重視してきたのは、こうした破綻を回避するための大切な知恵だったのでしよう。

江戸庶民が大切にしていた価値観、例えば江戸商人の中で最高の約束は「口約」だったというのも、「世界定め」の主体であることが許される人間」を考える上で重要だと思われる。

江戸庶民、さらに古くは万葉人などの生き様の中の知恵は、単に人間を社会的制約に縛るものではないと思います。先ほど超現実という言葉を出しましたが、そうした制約を突き抜けた先に、個々人が主体的に設定した世界を有意義に生きる生活が実現できたのだと考えます。

〈参考文献〉

- ・日本人なら身につけたい江戸の「粋」(植月真澄著 KAWADE 夢新書)
- ・少年少女のための「江戸しぐさ」(越川禮子林田明大著 三五館)
- ・図説 江戸っ子のたしなみ(藤原千恵子編 河出書房新社)
- ・子どもの『氣どり』に関する一考察―我慢の美意識―(宮田 児言態雑誌13号)

〈参考 数学の「公理」について〉

こうした「世界定め」が個人内の「やくそく」によってどのようにでも成立する、というのは「現代数学の体系」というのと非常によく似ています。

普通の高校教科書までの「公理」の扱いというのは、「疑う余地もないもので、証明する必要もなく、自明の真理として認められるもの」というものです。

しかし現代数学に関する啓蒙書などを読むと、ある時期から「公理」の位置づけが根本的に違ってきているというのです。「真理」「自明」というのは問題にされず、一つの論理を組み立てる出発点として「こういう前提です」と宣言したものの、なのだそうです。

だから、それを前提にして組み立てた論理による体系が矛盾なく組み立てられていれば、それは真偽とは関係なく一つの「世界」

として認められるということです。

4. 「思考」についての簡単な整理

「世界定め」の出発点となる「個々人」とつての当たり前の設定と同時に、そのあとの世界を組み立てていく「思考」についてもきちんと整理しておく必要があります。

児言態では、人間の思考について「感情思考」「イメージ思考」「論理思考」というように分類することがあります。

「物事を結び付けていく根拠」が思考ですから、個々人がどんなやくそく(因果律)の世界を定めていくのかというのは、これらの思考法とどのように向き合おうとしているのかにかかっています。

客観的にみれば言動が矛盾だらけで「あいづはなんて出鱈目なんだ」と否定的に言われてしまいがちな感情思考ばかりの人間には、論理性のような筋道の通った一貫したものは無いと思われるがちです。しかし本人にとって根拠としているものは自分の利害感情・損得勘定です。その場その場で「どうすることが自分にとってベストなのか」という点は全くぶれていない、「一貫して筋の通った生き様」なわけです。結果として「矛盾なく完成された論理を自分は構築したのだ」と自負しているのと同じなんでしょう。こうした人々に

とつては、損得を抜きにして自分の言動に責任を持つというような生き方こそ自分の感情に矛盾した生き方であり論理の破綻を招く、つまり自分の世界にはなり得ないと受けとめるわけです。

イメージ思考は、本人の抱いているイメージなりに筋は通しているという姿勢がみられる点で一貫していますから出鱈目さは軽減されるかもしれませんが「妙な考え方の持ち主だな」と思われがちです。

それならば論理思考中心の人物が最もいいのかと言えそうですが言い切れません。先述したように大前提の吟味が必要な場合があります。また「論理思考」に自信のある人間などは、逆に巧妙に話をすり替えたり、相手を誘導したりすることがあります。そうして自分の都合のよいように相手や世間の世界を作り替えたりしていくわけです。

それでも、世の中では一つ間違えると「論理思考」ばかりを推奨し、「感情思考」「イメージ思考」は幼い段階の低級思考として否定・排除することがあります。

そうした考えは人間本来の姿から外れてしまふ、というのが児言態の立場です。

確かに中学年になると現実的な思考に目覚め、それまでの「感情思考」「イメージ思考」から脱却しようとしはじめるわけですし、そうなるように論理を扱った授業を仕組むべき

だというのが上原先生の主張でした。

しかしそれをふまえた上で、5年生以降は再び「感情思考」「イメージ思考」を復活させて、時と場合に応じて自由自在に使い分けられるように目覚めさせていく、というのを重視しています。

「思考」を分類するもう一つの観点は物理学でいう「次元」に譬えた分類です。古事記を通して日本人の古来からの生き方を探求していた私の父の受け売りですが、0次元（点的思考）から1次元（直線的思考）、2次元（平面的思考）、3次元（空間的思考）特に日本古来の発想を指す場合には球体思考、という具合に次元を増やしていきます。父の記述ではここまでだったのですが、時間軸を追加すれば文字通り「4次元の思考」となるでしょう。物理学で一般的に言われている次元の具体的な説明は4次元までで、それ以上の次元については学説がいくつもあります。私と数学を専門に学んだ教え子であるKOU君で語り合っているのは「並行世界」（パラレルワールド）をふまえていく次元です。それが教育という観点から「世界定め」を考察していくには適していると考えています。（思考の次元については次号でもふれます）

ちなみに数学でいう次元はもっと抽象化した感覚でそれぞれ自由に「基準として設定した軸の本数」を表します。観点となる軸が20

あれば「20次元」という具合です。雑誌17号に掲載の私の文の中で「レンガ積み職人」の実践を紹介していますが、その分析での「意識世界の構造図」（P101）などはそれにあたります。

5. 体感を伴う意識世界が個々人の現実

このところバーチャルリアリティ（VR仮想現実）の技術が急速に進歩しています。例えば「VRゴーグル」。私も持っていますが画面の解像度はそれほどなくても、しっかりと作りのゴーグルであるほど没入感が得られ、仮想世界に本当に自分がいるかのような感覚を覚えます。

そのようなリアル感が可能になったのは、何と言っても自分の視線や体の動きに即座に対応して画面が動くようになったことでしょう。それによって脳は騙されるというより、リアルな世界として認識してしまいます。

最先端の研究では「体感」をコントロールすることによって現実にはあり得ない世界に本当にいるかのような新たな体感（実感）をつくりあげてしまう……この前テレビではヘッドホンから聴かせる音によって左右の耳の間の頭の中を生き物が通過しているような感覚を作り上げる実験を紹介していました。

放送大学の「錯覚の科学」という講義内容

も興味深いものでした。（テキスト 菊池聡著 放送大学教育振興会）この番組の中で紹介されていたものにラバーハンドイリュージョンというのがありました。（ネットで検索すれば動画サイトにも実験の様子を紹介したものがあります）作り物と分かり切っている手の模型に自分の感覚が宿ってしまうという実験でした。さっそく私も洗濯用のゴム手袋を使って教え子に試してみました。私も含めて最初に実験した4人は、一発目からゴム手袋を自分の手だと認識してしまいました。その後さらに何人かに試したのですが、全体としてはそうした錯覚が起きない人の方が多い数派でした。

こうした錯覚がすぐに起きるタイプと起きないタイプとで、こういった構えの違いがあるのかは今後の興味深い課題なのですが、何らかの形で「世界定め」にも大きな影響を与えていることは十分に予想されます。

私自身の体験からもうひとつ……数年前からフトしたことをきっかけにアニメ画のイラストを描くようになりました。もともと絵などは苦手で、最初の頃などは手本をよくみて描いたつもりでもバランスが相当ひどいものでした。

イラストの入門書には「時々裏返してすかしてみると良い」と書いてあるものもありました。やってみると、ちゃんと描いているよう

に見えるのが、なるほどんでもなく歪んでいることに気が付く……表にしてみると今度は確かに歪んでみえる。これは不思議な感覚でした。

「自分はちゃんと見ながら描いている」と思っただけでいれはいるほど、見ている通りにちゃんと描けているという世界を脳が作ってしまっているというのを痛感しています。

そう考えると、こうした視覚だけではなく人間のあらゆる五感も自覚しているよりはるかに脳によって個人個人の知覚内容が自分に都合よく変換されているようです。

イメージ研究の分野で発言態が大変にお世話になった藤岡善愛先生も、外界と内界の間にある「知覚」について、「知覚が取り込んだ外界の情報から得たイメージをイメージタスクに蓄積していく」という方向だけではなく「蓄積されたイメージが知覚に影響を与える」というようなことを述べていました。

まさにそのような感じで、そもそもが「個々人の興味・関心というフィルターを通してかなり偏った情報しか知覚していない」のに、さらにそれらを自分が無意識に変換している……そうして蓄積されたことで作り上げられる自分の中の「因果関係づけ」が無意識に「自分の中のやくそく」を形作り「世界定め」を行っている、と考えられます。

錯覚の分野では有名な事例が数多く知られ

ています。それらは実験前に「本当はこうなのだ」ということを確認しても、やっぱり違っただけで感じ取ってしまう。これも不思議なことです。頭ではどんなに理解していても、錯覚しているものの方が現実として受け止められてしまうわけですから。ただ、こうした万人に共通な錯覚の例では「これは錯覚だ」と了解しています。なのでそれがそのまま日常生活に影響することはほとんどありません。

それに対して個々人の脳が勝手に作り上げ、現実感を伴って受け止められている世界には錯覚という自覚はありません。

幼い子どもなどが「おままごと」などのごっこ遊びに夢中になっている時などはまさにこの感覚でしょう。自分の意識世界を本物と思うから体感が本当に伴ってしまう……体感が伴うからますます本物の世界としてとらえる……この繰り返しです。

そう考えると、人間に客観的な認識などあり得ないと言いつけるのかもしれませんが。人間が「現実」と受け止めている周囲の出来事も個々人の錯覚から出来上がっていて、同じ世界に居るという人間はだれ一人としていない、というのが本来だったのだらうと思えます。

でもあまりにも無意識に脳がそうさせているだけに「自分にとっての当たり前」は「他人にも当たり前」という前提に立ってしまいがちで、そこから齟齬が生じ、あらゆるトラ

ブルの原因にもなっています。

このある意味で自分にとって都合よく世界を作り替えてしまう脳のパワーは怖いくらいに強力だと特に最近になって感じています。

イラストに限らずこれまでの人生・日常生活の中での他人とのやりとりでも客観的に物事をみて判断してきたと思っっている場面でも、かなり偏った見方しかできていなかったんだらうと思います。

かつてはある程度の年齢になったらそうした偏りを自覚した上での生き方が出来たのが、昨今では大人になっても不十分であることが多いというのは先述した通りです。

こうした脳のパワーを逆に利用する考え方を日本人は古来から持っていました。それが最新の脳科学でも裏付けられてきたようです。体感を変えることによって脳の作り出す世界を変える例として、昔からよく言われてきたのが姿勢のことです。落ち込んでいる時、人間は自然にうつむきの状態になるわけですが、意識的に胸をはるなどして姿勢をよくすると脳は「あれっ？ 自分は思っているほど落ち込んではいないのかな？」と思っただけで、意識世界を変えてしまう……歌でいえば「上を向いて歩こう」のあの境地です。兎言態風にいえばイメージ運動の方向を変えてしまっただけです。

これは「プラス思考」と呼ばれているもの

よりもはるかに強力です。思考レベルではなく体感レベルの世界ですから、より脳は意識世界を変革し、現実世界そのものが変化したかのように実感させます。

〈上原語録〉

・「体に変化を与えると住んでいる世界が変わる。」と言う事を昔の人はよく知っていたんだね。
(平成6年新年会)

・知覚は直ちに世界。体験しないものさえも世界を作っていく。
(平成5年11月例会)

・イメージは肉体現象からしか発生しないのではないのか？本来、肉体的なだから行動的なものになる。

だから言葉を飛び越して行為になる。心意伝承となっていく。
(昭和63年7月例会)

・すべての鍵は身体感覚が持っている、というのが現在の上原のこだわりです。

(平成2年合宿)

・(4年教材『たかのすとり』について)

……最後子ども達が帰るときに「アッチー」って言って笑いながら帰った、というところですよ、大事なのは。つまりね、怖い思いをしたわけでしょ、それを、最

後「アッチー」ってやったことで『楽しい思い出』にしてしまったんですよ。怖い思い出を『楽しいイメージ』のオブラートで包み込んでしまったんですよ。そうして『楽しい思い出』として心にしまいこんで家に帰っていった、そういうことですよ。イメージにはそういう働きがあるんです。これが『子どもの持っているたくましさ』だったわけですよ。(昭和62年5月例会?)

6. 芸事の世界にみる日本古来の発想

学生時代の仲間で上原先生のゼミに所属していたNという人物がいます。彼の家は日本舞踊の家元でした。そんな彼から「型」について聞いたことがあります。とにかく日本舞踊の稽古のときには型の修練に徹して役の気持ちなどは一切考えてはいけないんだそうです。そこが西洋の演劇などの考え方とは違うのでしよう。型の稽古を積んでいく中で、ある時フト「型が決まった」と感じる瞬間があった、そうなった時に演じる精霊などが自分ののり移っているような感覚になれる、との話でした。

能に関する番組を観ていた時に能楽師の方も同様のことを話されていました。シテが演ずるのは「神や精霊など人間を超越した存在」、つまり人知を超えた存在なのだから、

人間である役者が稽古の段階で「役の気持ちを考える」だの、「役になりきる」だのという発想がそもそも成立しないんだそうです。

この「今の自分をはるかに超えた存在になる」というための発想は「芸」の世界だけではなく、日本人の教育観の根本にもあったことであり、そうした発想を現代に甦らせたというの、ここから先の内容の裏にある想いです。

平成28年11月のことですが、近くの百貨店の「京都物産展」の特別ゲストとして舞妓さんと芸妓さんが招かれ、京舞を披露してくれました。

この「古き京女」の権化のような芸妓の方が実は沖縄出身だと聞いて大変驚きました。実際に舞妓さんも芸妓さんも京都出身の方は少数派で出身は日本各地なんだそうです。

その際、質問コーナーがあったので、私も「型」のを中心にいろいろと聞いてみました。このイベントには京都のいわゆるお茶屋の女将さんもいらして、イベントの後、この方にも個人的にお話を伺えました。

教育について考察するのに大きなヒントになると考えられる内容を箇条書きにしてみます。(●)は芸妓さん(○)は女将さん

○舞妓の世界に入るのに技能試験というもの

はない。必要なのは本当にやりたいという気持ち（覚悟）

●日本舞踊の稽古などを幼い頃からしている必要はない。京都では「井上流」と決められているので、むしろ他の流派が身についているのは邪魔になる。

●「型」の修練をしているうちに自然に京女になっていく。

○上達がどんなに遅くても、こちらから「諦めなさい」と言うことはしない。続ける気持ちさえあれば、どこかの段階で必ず花開く。

○芸妓になってからの引退の時期も特には決められていない。70代、80代の現役もある。芸の修練には終わりが無い。高齢で素晴らしい芸をする先輩たちが実際に周囲に大勢いる中で生活。

最も大切なカギをにぎっているのは、そうした先輩たちの芸と接する中での『憧れ』

芸の修練というのは「型」の修練と同義なわけですが、その際に最も大切なのが『憧れを抱き続けることです』というのとはとっても印象的でした。

NHKの番組で「新日本風土記 祇園」や「祇園・継承のとき」井上八千代から三千子へ」で描かれていた世界もこうしたことを裏づける内容でした。「最初はきこちない立居振舞がある節目をきっかけに突然変容していく姿」あるいは「現代の常識からすればとくに身体能力が落ちて現役引退と思われるであろう90歳を過ぎてても後の者が到達できない境地の動きができる」……そうした姿を実際に日々みていけば西洋的な常識に染まってしまう「成長」「年齢」「美」等々に関するイメージは根本的にひっくりかえります。

上原先生は「人間」中でも「心意伝承」の研究を一生涯続けられたわけですが、初めて心意伝承について本格的に発表したのが「芸談の研究―心意伝承考―」（昭和47年 早稲田大学出版部）です。難解きわまりない内容で今でも私はアウトラインさえつかめていないのですが「移り」とか「成る」というキーワードにはずっとひっかかっています。

そうした観点から上原先生の記述をみてみると「構造」「様式」ということに関するものが大変多くみられます。それはやはり「型」ということが根本にあるからなのでしょう。言い換えれば「型」は「器」であり、大器ができればできるほど大いなる存在

がのり移ってきて、今の自分を超越した存在に成っている、ということのようです。

この「型」という観点からも「論理思考」の世界を中学年の時期にきちんと通過させる必要がある、という先生の持論が深くかわっていると考えられます。

それは単に「筋道をたててきちんとコミュニケーションをするために論理的な訓練も行う必要がある」という一般的なとらえ方とは全く別です。

無意識に想定してしまっている「自分」という枠を自らぶち壊し、「まだ出会っていない想定外の自分をさらに奥の集合的無意識世界から引っ張り出すためのツール」としての論理思考です。

そういう意味ではイメージ運動のパワーが強い子ども達も注意してあげる必要があります。自分のイメージ世界をしっかりと持ち、それを大切にします。自分らしい伸ばし方でどんどん伸ばしていける……それも一つの大切な生き方ではありますが、逆に言えば狭い規定路線の枠内で、ある偏った方向にのみ突き進んでいるだけに終わってしまうわけです。

次号のキーワードは「添加」なのですが、それが意識世界をどれだけ広げ得る力を持つのか、という点でも論理思考は大切です。

〈上原語録〉

・日本人の考える魂は浮遊するんです。魂が抜け出てどこかに飛んで行ってしまう。飛んで行く先が『あこがれ』なんです。(国語)

・イメージ自体が持つ働き……イメージが人間の生命を誘導しているという事です。早くそういうの悟るといいんだけどね、みんなもね。そうしたらもっと体感を大事にする……。

人間の一生なんてそれですものね。完全にイメージが導いていくんですよ。

イメージっていうのはエネルギーの爆発だと思う。イメージは生命力なんだから。

(平成6年合宿)

7. 「壺」と「人生の世界定め」

児言態が平成6年の頃から取り組んでいる研究テーマの一つに「壺」があります。壺作文を通しての詳細な分析は今回の目的ではありません。しかし、「知られざる自分の可能性も含めて生涯に渡って自分の世界を広げていける構えの獲得」と、「壺意識の変化」には通じるものを感じています。「思考・感情・イメージ」そして「構え」がどうせめぎ

あつて成長しているのが垣間見える気がするのです。

まず上原先生の語録の中の「壺」に関するものでこのようなのがありましたので紹介します。

〈上原語録〉

〔つば〕作文。つばの中の海、について海にうつる。『移り』は人間の美意識のひとつなんです。これが子どもの中でどう発達してくるか。一つの意識から、どこから次の意識に移るのか？これが自由に出来るから子どもは楽しいんです。

西洋の感覚では「風邪がうつる」のようにキャッチの感覚だが、日本人の感覚では「縁もゆかりもない事が別でも起きた」時が『うつる』なんです。非合理的なものを見れば見る程、日本人はそこに『因果』を考えようとしている。脈らくのないものに脈らくを感じることが出来るんです。

『子どもの論理』はこれなんです。だから平気で飛躍できるんです。

(平成5年忘年会)

イメージのまま記述していれば、どの成長段階になっても「こんなにいっぱい壺の中に入っているわけがない」「これとこれ

が同居しているなんてあり得ない」等々の現実意識はありません。イメージの赴くままです。

一年生ではその閉ざされた世界の中に様々なものが同居していて、多くの場合「壺の容量」は無限です。

〈作文例〉

・つばの中にはわたしが4さいぐらいのときのとばしたしゃぼん玉、それからわたしがまえだいいじにしていた金ぎよがいきているようにわらっていた。……まえしんだ金ぎよだからだめだなあつとおもったけど、げんきにおよいでいた。

(小1女子 湘南白百合)

二年生になると「吸い込まれる」「違うものに転換」というような「壺の持つ力」が前面に出てくるものが目立ってきます。

〈作文例〉

・つばが一つあった。そしてつばをかぶったらぬけなかった。そしてつばをとったらちがうくにきた。ぜんぶこわれている。うちもこわれている。そしてもういっかいつばをかぶったらちがうくにきた。

(小2男子 石崎小)

中学年に向けてどんどん増えるのが「物語」という形式です。ゲームの影響が強いストーリーが目立ちます。そのことによってイメージ世界を記述することが許されるという感覚のようです。低学年では一つの閉じた世界だった壺の中に「壺の中に壺」「旅していくと次々と壺が現れる」という構造の広がりが目立ってきます。

〈作文例〉

・そのつぼにはうんちがはいっている。でも
とうめいなうんちです。その中にはうんち
の国があった。……（小4男子 石崎小）

一般に4年生あたりで現実思考がイメージ思考を上回る傾向が出てくるので現実の壁のりこえられずに苦勞します。分数に譬えれば「夢を分母・現実を分子」として生きてきたのが逆転するわけです。そうした児童の実態が表出した授業記録が今回の雑誌、18・19号の中にもあります。

その思考の転換を突き抜けた先の新たな境地に到達しうるように、5年生以降では意識のベースとしては夢の世界に主軸を置きながら「夢の世界」と「現実の世界」を自由自在に使い分ける（分母・分子を自在にひっくりかえす）力の獲得……「世界定めができる主体」としての構えを獲得できるように、どう

支援するかというのが主眼になります。

この段階でのポイントは「現実思考に目覚める」ことに伴う気位への配慮です。例えばそれまでの夢を疑わなかった自分を「幼かった」と卑下する恥じらいの気持ちです。なのでそうした意識が強い子どもほど安易にイメージ世界に浸っていた頃の自分に戻ろうとはしません。その場合は無理にイメージ思考に引き戻そうとしないで、十分にその段階なりの意識を語りつくしてもらい、受容することが不可欠だと思います。現実意識でいっぱいになってしまっている壺の中身を一度空っぽにしてみようという感覚です。

この時期をうまく通過できたのだらうと思える5年生・6年生の壺作文があります。

この場合、低学年とは違って現実的な要素を意識した上で想像を巡らせ、イメージ世界を構築しているという印象が強まります。

〈作文例〉

・ギリシャ宮殿の中で貴族たちと一緒に何年間も優雅な暮らしをしたものもあるだろう。……きつと一つのつぼで何十もの物語を伝えてくれるに違いない。

（小5女子 学習院）

・（1年生から4年生までの思い出を記述したあとで）私はこの思い出を心のつぼに入

れて5年生になった。（小5女子 学習院）

物語形式が圧倒的だったのですが、中学年とは違って「自分を内観する」ことに関わるようなものが多くみられました。中には今回のテーマである「世界定めをする主体」に直接かかわる記述もありました。

〈作文例〉

・心のつぼは奥が深い。ずっと奥まで続いている 長い長いトンネルみたい。でもいつでもいっぱいに満たしたい。そのために沢山沢山努力をしたい。いつでも自分を好きでいられるように。いつでも輝いていられるように。（小6女子 学習院）

・（人間の願いを聞き入れる力のある壺と出会った男の子の物語。身勝手な欲望ばかりでうんざりだという壺に向かって「あなたを壊す」と宣言）

「何でもかんでもかなえてくれる壺があるから努力しなくても手に入ると思ってしまった。そういうのは自分で手に入れるべきでしょう。だからあなたを壊したいのです。」その顔には強い意志が示されていました。……（小6女子 学習院）

・（過去にタイムスリップさせてくれる力を

持った壺と少年の出会いの物語 最後の場面
のやりとりより)

「そう、僕はあなたが過去を正しくやり直せるようにやってきたのです。大人になつて水泳をやめたことを後悔しないように……あなたは未来への正しい判断ができました。なのでぼくはもといた場所に帰ります。……」もうぼくはツボタイムとは出会えないだろう。未来への正しい判断ができるようになったから。でもある春の日また出会えることを僕は待っている。

(小5女子 学習院)

*こうした分母・分子の転換が自然に出来てしまう存在として上原先生が注目されていたのが「英才児」です。英才児については次号で述べます。

たまたま平成28年3月に書かれた中学2年生の壺作文を読む機会がありました。一見すると表面的な内容が目立つのですが、読みようによつては「壺」を通して「自分が世の中に如何に評価されるか。存在理由・存在価値とは何か？」が圧倒的な関心事であるという、まさに「中2」という時期の若者たちの生感そのものが表出しているようです。

《作文例》(広島県私立中 中2たち)

・世の中にはいろいろなつぼがある。特大のつぼやとても小さいつぼ。長細いものもあれば、平たいものもあるだろう。どこかひねくれているつぼは、正直なほどに形の整ったつぼ。うつくしいつぼもあれば、素人がつくったのだらうみにくいつぼもある。この文章を読むあなたはどんなつぼだろうか。

・芸術作品で、良いものと悪いものがある。価値のあるものは、億を超え、価値のないものはお金にならない。デザインがさまざま。

・つぼは尻軽女。何でも入れられて、誰にでも見られる。気に入った人を買われ、買い主がいなくても居候するからだ。売れてまた気に入った人を買われる。何でも受け入れることはすばらしく、また健気にもみえる。

・つぼの中でも価値がある物だつてそんざいする。つぼも人間みたいだ。人間にも仕事があるように、つぼにもつぼの役割がある。もしかしたら、つぼにかぎらず、物にも命があるのかもしれない。

・「つぼ」はいろいろな形や色があつておもしろい。中をのぞいてみたら、真つ暗で何も想像できなくなる。中は真つ暗だから、怖くて不安や孤独感が感じられる。見た目はいいかもしれないけど、中は全部一緒だから全てのつぼはおもしろみが全くない。だから私は見た目だけで、おもしろみもなく、不安や孤独感があふれているつぼのことをすきではない。

小学校中学年での現実意識の目覚めは、夢の世界のままでも許される環境の中での目覚めです。それに対して14歳前後(思春期の真つただ中)は進路などについて考えることを突き付けられる(昔だったら元服をして戦場へいく・嫁にいくなどのような本当にシビアな現実対応に放り込まれた)年齢なわけです。そしてそれ以降の大人として過ごす時期は、「自己責任」をともなつた社会人としての主体的な生き方が要求され続けます。

《上原語録》

・忙しい現代人は現実世界だけでボロボロになつている。昔の日本人の方がイメージ世界が大きい。だから現実には立ち向かうこともできた。

(平成6年4月例会)

・人間は時としてイメージが動かないところ

ろに追い込まれピタリと停滞してしまふ。
その打開のひとつの方法としてトランス
フォーメーションがある。時間・空間を動
かしてやる。

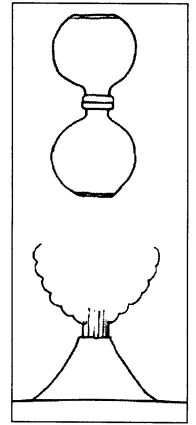
人生の苦難を我慢して乗り越えるのでは
なく、トランスフォーメーションによつて
意識を動かすことで乗り越えるんでなく
ちや。

(平成7年7月例会)

この上原先生の言葉に通じるような中学2
年生の作文もありました。

・つば。それは私に自由を与えてくれる。こ
のつばを見て、何を思い、得るのか。人そ
れぞれ違う。私はこのつばを見て、自由に
想像する。会社や家庭でいろいろな問題を
かかえている私をつばは、引き離してくれ
る。

教え子であるKOU君と壺意識について語
り合う中でいつも話題になるのが二つの壺を
口の部分で貼り合わせたようなイメージで
す。もともとは地球内のエネルギーが圧縮さ
れたものが火山から噴火し、噴煙として空高
く広がっていく、という構造との類似からの
発想でした。



この真ん中のつばまった部分が「圧縮と解
放」あるいは、一度中身をカラにするから新
たなものが流れ込むという日本古来の発想で
ある「禊」の働きを感じさせる、ということ
です。

特に禊の感覚は大きなポイントです。現実
意識にとつぷり浸かる象徴である黄泉の国を
突き抜けた先で、これまで自分を支え、包ん
でくれた杖や衣服を思い切つて脱ぎ捨て
て洗い清めることで新たな神々が誕生する、
というのは最も飛躍の可能性を高める自分
自身による器化です。(児言態用語でいえば
「裁断と継続」「死と再生」小学生の書く壺
物語もそうですが、現実的な印象を書いてい
る形の中学2年生の作文でも壺が壊れるとい
う記述がしばしば登場するのは、もしかした
らこうしたことの影響なのかもしれません。

*あらゆる世代の方々の「壺作文」を日本中
から集めて整理することで、日本の教育の
根幹を考える大事な資料が得られると考え
ています。様々な方々の共同作業でそのよ

うなことが実現できればと思っています。

8. おわりに 大人も共に変わればこそ

さらなる詳細については次号の原稿に書く
予定なのですが、4年生前後で現実意識
(数理的思考)に目覚めた子ども達に対して
5〜6年で再び夢の世界を復活させ、両方の
世界を自由自在に行き来できるように、とい
うのが上原先生の抱いていた見通しでした。

しかしそれは単に中学年までのイメージ世
界をそのまま復活させ、それと共存していく
ということではありません。

実際に中学生以降になると自分の想いが完
全に押しつぶされそうな強い圧力が周囲の現
実から襲ってきます。仕事でも結婚でも、そ
れこそ「自分の想い通りになる夢のようなバ
ラ色の理想世界がどこかにある」という幻想
を抱かせるような言葉もあふれている昨今
……どんなに善意ある大人から「前向きにプ
ラス思考で生きて行こう」「将来の夢を諦め
ないで。信じていればいつかきつとかなうか
ら」と言われても、そういう生き方が出来て
いるような人間と自分とのギャップにますま
す自己嫌悪になって追いつめられてしまう場
合が多々あることもこの20年あまりで痛感し
ています。

特に自分が信頼しようとしている大人から

のこうした助言は、悪意ある言葉と同様に若者達の「今まで」を否定し、心を傷つけてしまう危険性がある事を大人の側がしっかり自覚しておく必要があると感じています。

そんな若者たちに対して「自分という意識を捨てるのが大切」という逆説めいたことを上原先生も、あるいは解剖学者の養老孟司氏も説いていますが、現実と夢との本当の折り合いのつけかたは西洋流合理的発想ではとれないのかもしれませんが。

今回の内容は全般にわたって教え子であるKOU君（茨城大学 理学部理学科数学・情報数理コース卒）との考察がもとになっています。「壺意識の考察」には社会人であるチヨコレートさん（福祉関連 雑誌17号でCさんとして登場）、ノブ君（建設業関連 雑誌16号にも登場）も加わってくれて多様な角度からの意見を頂けました。この場をかりてお礼を申し上げます。

まとめとして中2の壺作文全員分を読んでのチヨコレートさんの感想から一部紹介します。（平成28年12月）

『1回目読んだときは、だいたいの子が現実的なのかなーと思ったの。でも2回目読んだときは、そうでもないと思えてきた。書く子が変わったんじゃないなくて、読む私が変わってることに気づいたよ（笑）』

「中2病」って言葉があるように、1番こう：なんつーのかな、狭間つーの？ 大事な時期じゃん、来年受験とかさ。勉強とか親の期待とか、人格決めつけられるような失敗できないとかさ、今迄の人生に大きく響くかもしれないこの壁をどう乗り越えていくかが本当に大切じゃん？ 何も受験だけじゃなくて人生トータルでね。……イメージ世界で割と育ってきてると思ってる私でも壁にぶつかり、乗り越えられてると思わんけどね。悩み尽きねーし。

書き手よりも読み手だと思ったのよ。「教育」とかよく分かんないけどさ。こちらが気づいてあげる事が何より大切じゃない？

自分が中2のときはそーだな、あんま覚えてないんだけど反抗期真っ只中か？ 学校行きたかねー、クラスつまんねー、担任うぜえーみたいな。やる気：あつたような、ないか？ 心と体がバラバラか？

んで、中3になって（乗り越えられたのは）周りの支えあつてこそ私の私よ。感謝。親とか先生とか担任とかさ、私を否定したりしないでくれたからだと思う。』

*上原先生はこのような周囲の存在を「庇護者」と説かれています。雑誌17号の私や秦恭子さんの原稿などでもとりあげています。

☆追記 「馬」の研究

この原稿を執筆した後、あることをきっかけに「馬」にまつわる日本人の意識などを調べ始めています。これについては晩年の上原先生が「教育」という視点を越え人間の生き様の根源に関わる問題と位置付けられていたもので、この「生涯編」に上原語録の一部を紹介しておきます。（児童態のツイッターやブログでより詳しく紹介しています。）

・イメージ研究を象徴的に捉えるならば『馬』だって言ってもいいだろうと思う。

・馬は我々のかわりを全部つとめてくれる。イメージを全部、馬がしいてくれる。

・『世界定め』は馬がしてくれたともいえる。

・『人間が馬を駆使していると考えちゃいけない。馬がいたから人間がいたんだ。』そう考えたらわからない事がたくさんわかるようになってきた。

・馬を手放したから日本人のイメージが正常に動かなくなったのかもしれない。かつては馬によって『私はどこへ連れて行ってもらえるのだろう。』と考えていた。

（元小学校教諭 現家庭教師）